

幌内布引アートプロジェクト炭鉱 炭鉱の遺産を掘り起こす#2

著者	上遠野 敏
雑誌名	札幌市立大学研究論文集
巻	4
号	1
ページ	69-76
発行年	2010-03-31
URL	http://id.nii.ac.jp/1261/00000068/

●メイン会場 北炭幌内炭鉱 布引立坑跡

上遠野 敏 & 札幌市立大学美術部 noumenon

北炭幌内炭鉱は、北海道最初の近代炭鉱として開発された 1879(明治 12) 年から閉山の 1989(平成元) 年まで、その歴史は世紀を超える。数ある坑口の中で布引坑は、1917(大正 6) 年に開削された深さ 297 m の立坑で、その後半世紀にわたり主力坑口として活躍した。1967(昭和 42) 年の幌内立坑完成によって、入坑口から坑内排気へと役割が変化したが、1975 年に幌内立坑直下で発生したガス爆発事故では、その復旧作業に欠かすことのできない存在であった。1970 年代後半には沢を埋めていた炭鉱住宅もほとんど姿を消し、1983 年の坑内合理化によって立坑は役割を終えた。閉山時に主要施設は撤去されたが、開削時に建設された煉瓦・コンクリート合築の巻上機械の建物や、坑口から排気扇風機に至るコンクリート風洞は、今でも残っている。上遠野敏と札幌市立大学美術部 noumenon(ノメノン) が、幌内炭鉱半世紀の歴史を記憶した空間を活かして作品を制作した。



場所	アプローチ	状況・休館所	巻上室
No.1	作者 【タイトル】 冒険	札幌市立大学美術部 noumonon 【学心】 2017年夏、ヨーロッパ	上道野 敏 【海の宝篋】 上道野 敏、阿部マサキ、藤上正樹
		札幌市立大学美術部 noumonon 【ドコカラコヘク】 2017年、日本各地	上道野 敏 【不在の宝篋】 札幌市立大学美術部 noumonon 【不在の宝篋】 阿部のイデア、伊藤
風洞	風洞解説	ビジターセンター	布引隧道
5	上道野 敏 【風のやま】 風、雲の巻、風評評	7	上道野 敏 【夢かなど土地】 札幌市の道産物産地に係ってき た札幌のクリエイター集録。そ の要約の地に空間を翻訳する。
6	札幌市立大学美術部 noumonon 【観月鏡】	8	SARD 上道野 敏 【うしろの住家】 うしろへ集る。オアシス、緑、太陽、雪、 星。観望・パノラマ写真



制作風景



作品「手ぬぐう道」

1. アプローチ 札幌市立大学美術部 noumenon 作品

「手ぬぐう道」 白いタオル, ロープ

鮎夫が坑内の中に入るとき白い手ぬぐいを首に巻いていた。この手ぬぐいは、汗を拭ったり、怪我の手当をしたり、マスクの代わりとしても使われた。鮎夫にとって白い手ぬぐいは炭鮎仕事の必需品であった。現在、森となった布引立坑へと続く道に、白いタオルをフラッグの様に掛けることで、当時往来していた沢山の鮎夫の活気を表し、鑑賞者を向かい入れる道しるべとした。

■火薬庫

坑内で使用するダイナマイトを保管するためのレンガ造倉庫。川の対岸にある大きな倉庫が保管用で、誤爆時に備えて土塁が巡らされるなど、施設の設置・管理は法令によって厳しく規制されていた。手前の小さな倉庫では、当日の坑内携行分を一時的に保管し、ここから火薬有資格者がダイナマイトをリュックサックに詰めて坑内へ入っていった。

2. 立坑繰込所 札幌市立大学美術部 noumenon 作品

「ドコカラドコヘユク」 テグス、その場の素材

鉱夫の繰込所。入坑前や後の憩いや交流の場として鉱夫の安らぎの場でもあった。現在では天井が半壊し、地面には木が生え、建物が自然へと還っていく様子を見ることが出来る。地面には、崩れた屋根の材木や、古びた部品など、当時の痕跡がいたる所に残されている。それらのものを、その位置のままで宙に浮かせ、時の経過による物語を想起させる空間とした。

■立坑繰込所

山の向う側（現在の幌内炭鉱景観公園付近）にあった炭鉱事務所と立坑の間を連絡する人車（人員用トロック）と、坑内へ入出坑する立坑ケージとの乗り継ぎ時に、鉱員が待機していた建物。入坑前に一服した後は、捜検（発火の危険があるマッチなどを所持していないか確認する身体検査）を受けてから入坑した。



制作風景



作品「ドコカラドコヘユク」

3. 捲上室 上遠野敏 作品

「陽光の聖堂」 太陽光、透明カラーアクリル板、捲上室空間



スタンドグラス作品「陽光の聖堂」/ワイヤーの動物作品「不在の気配」

「陽光の聖堂」

90年を経て主を失った捲上室は荘厳である。天井も高く、ドイツの炭鉱施設の内部空間を思わせる。天に向かって開くワイヤー孔や、絶妙に配置された多くの窓から降り注ぐ陽光はかつての栄華を想わせる。日本の経済を支えた基幹産業の炭鉱とここで働いていた人々の誇りに敬意を払い、現代のステンドグラスから降り注ぐ柔らかな色の陽光によって、かつての栄華と人々を奉るための聖堂（カテドラル）に見立てた。

■捲上室

入気立坑のケージ（坑内に入るエレベーターのカゴ：鳥かごのような形状であったことからケージと呼ばれていた）を昇降させるため、モーターや操作装置が置かれていた建物。レンガとコンクリートが併用された建物は、建築素材がレンガからコンクリートへと移り変わる端境期らしい特徴を有している。

4. 捲上室 札幌市立大学美術部 noumenon 作品

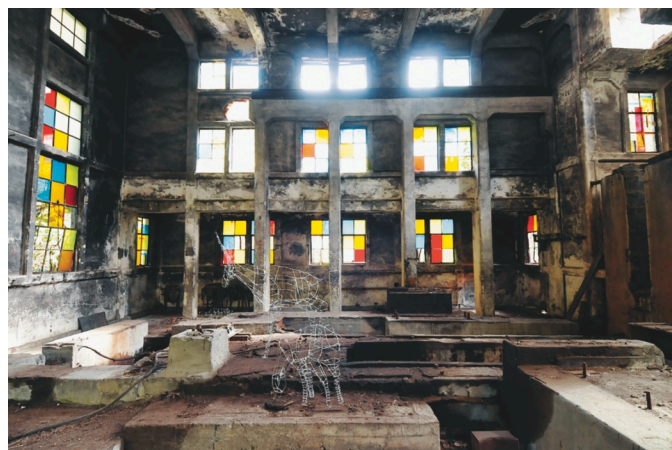
「不在の気配」 鉄のワイヤー、針金

人の気配のなくなった捲上室。人がいるあいだは現れることがなかった山の動物たちが、警戒をといて、この場所に現れる。ふたたび山の主となった動物たちの姿を、鉄のワイヤーの線で形作することで、存在を感じるが姿を見ることができない気配を表現した。彼らは人の不在、山へと還っていく場の象徴である。

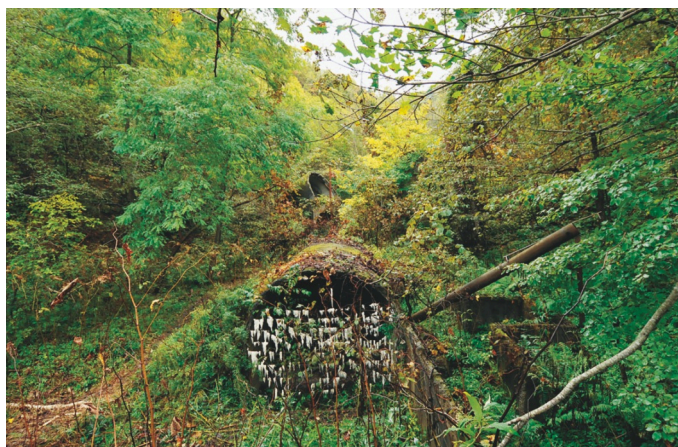


ステンドグラス作品
「陽光の聖堂」

ワイヤーの動物作品
「不在の気配」



5. 風洞 上遠野 敏 作品「風のささやき」 風、繭の毛羽、枝、風洞空間



作品「風のささやき」と風洞

布引立坑跡の景観の特徴は、長く横たわる苔むす風洞であろう。谷間の湿潤な環境は施設を緑のシェルターで覆い、「山川草木悉皆成仏」の極楽浄土の趣である。坑内の空気を排出していた風洞は役割を終えて、今では自然の風をかすかに出し入れして静かな呼吸をしている生物のようだ。風洞横に開け放たれた洞に風の流れを視覚化させて、時間と共に自然と同化して行く様子を繭の毛羽と落ち枝で表した。風と光と風洞空間の神秘性を味わうために、風洞内の懷に抱かれて裏から見ることを意図した作品である。

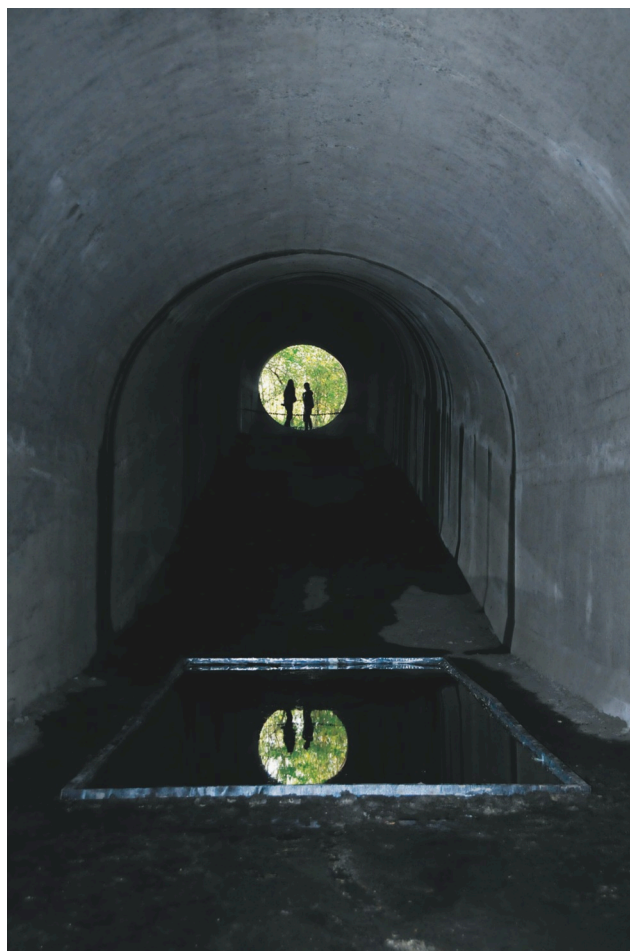
■風洞

1967（昭和 42）年に幌内立坑が完成し主力坑口の座を譲った後も、1983（昭和 58）年まで、坑内からの排気を担う重要な役割を果たした。坑内の汚れた空気は、布引排気立坑と最奥部の 4 片添風洞（4 号風洞）から地上に出て、コンクリート造の風洞トンネルを通り、その末端部に設置されていた出力 600 kW の扇風機（ファン）によって大気へ拡散放出された。

6. 風洞 札幌市立大学美術部 noumenon 作品

「観月坑」 角材、シート、水

風洞の中から見上げる排気口は、満月のように丸く光り輝く。底部に水盤を作り、水を張ることで光反射により 2 つの満月の光を鑑賞することができる。それらの神秘的な光は、より美しく場を明るく照らし風洞に入った人々を包み込む。



作品「観月坑」



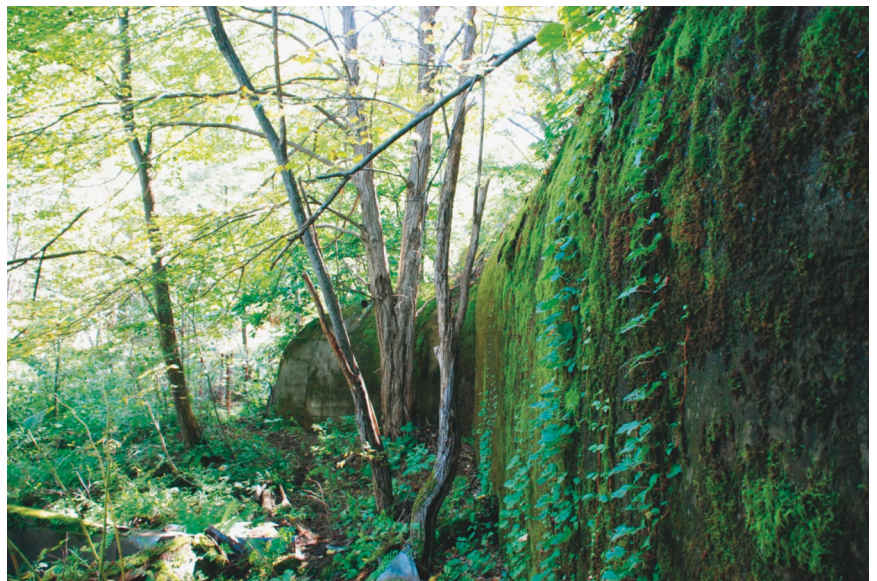
風洞の排気扇風機設置口の外観



風洞の扇風機設置口の内側からの雪の眺め



風洞の上部



自然が回復して苔むした風洞の外観

7. 風洞斜坑 上遠野 敏 作品

「夢かなえ地蔵」 札幌軟石、風洞斜坑空間

塞がれた風洞斜坑の奥深くには縦横に掘りめぐらせた坑道が横たわっている。今では役割を終えて静かな眠りにつく。戦後の日本の復興は、石炭を産出する人々の働きがあって支えたと言える。犠牲になった方々の鎮魂と人々の平安、併せてアートプロジェクトの安全を祈願して地蔵尊を安置した。布引立坑跡の敷地各所には、「夢かなえ地蔵」と「六道抜苦」のお札を置かせていただいた。

■風洞斜坑 4片添風洞（4号風洞）

海拔127mにある坑口から、地下-164mの坑底まで続く斜坑。幌内立坑とともに新たに掘削された排気専用の坑道で、幌内立坑から入った空気は坑内を巡った後、旧新幌内砒側の第2風井と旧幌内砒側の4号風洞の東西両翼の排気坑道から地上に放出された。平行して、4片添風洞のメンテナンスのために、もう一本の斜坑が掘られている。



作品「夢かなえ地蔵」



塞がれた風洞斜坑内部と作品「夢かなえ地蔵」



風洞斜坑外観

●ビジターセンター（総合案内所） 北炭幌内炭鉱 中央町 監察員詰所跡

札幌のクリエイター集団 SARD

二つの川が合流する幌内中央町は、今でこそ何もないが、沢を炭住が埋め尽くしていた往時は、まさに幌内の「中央」にふさわしい賑わいの場所であった。なかでも、二つの沢からの道の交差点は、炭鉱の人々の出入りを見張る監察員詰所が置かれていた。幌内の炭鉱遺産活動に係わってきた札幌のクリエイター集団 SARD が、その要衝の地に、ビジターセンターとしての空間を創造した。

8. ビジターセンター SARD 作品

「記憶の入口」 テント骨組み（鉄管）、針金、幌内神社からの解体材（木材）借用

炭鉱時代が終わり、この場所から布引へ向かう人々はいなくなった。一軒だけ残されたマンサード屋根の建物も時代の変化とともに傾き、存在以外は、その機能は失われつつある。傾きかけた建物に直角に、僅かな針金により連続する新たな空間は、再生された炭鉱施設の面影を伝え、人々を受け入れていく。まるでこれから坑内へ向かう人々の集まりのように。

■幌内中央町

1889（明治 12）年の幌内炭鉱開鉱時から、主力居住区として発展してきた地区。囚人労働で開発された開鉱期には、付近に監獄の外役所があった。ここから沢が2つに分かれ（布引隧道や幌内炭鉱景観公園がある本沢、布引立坑のある奔幌内）、要衝の地であったことから、ビジターセンター設置場所付近には、生協や商店が並び、人々の出入りを監視する観察員詰所も置かれていた。



ビジターセンター「記憶の入り口」



オープニングセレモニーの様相

9. 布引隧道 上遠野 敏 作品「黒い狩人の往来」

ろうそく，風車，オブジェ，鉄，太陽光，霧，水，隧道トンネル空間

布引隧道の入り口は幌内本町側にあり，布引立坑まで鉱夫を繰り出すためのトロッコ人車のトンネルである．現在はトンネル内部の崩落により水脈が切れて満々と地下水に浸され，霧と注ぎ込む太陽光の静謐な神秘を漂わせて森の中にポツカリと口を開けている．炭鉱夫が往来するにぎやかな往時の様子をろうそくの光と回転する風車とオブジェの影をトンネル内部の壁をスクリーンにして走馬灯のように映し出した．

■布引隧道

戦前は，各所に小規模坑口が分散していた．戦後になって，人員入出坑は布引立坑に，揚炭・資材搬入は常磐斜坑（布引立坑の山の向こうにある本沢地区，現在の幌内炭鉱景観公園内）に集約されたが，坑口浴場，作業指示を受ける繰込所，砒事務所など管理施設は，依然として本沢地区側に残っていた．ここから，入出坑口である布引立坑との間は山を挟んで相当の距離があるため，人車（人員連絡用のトロッコ）で結ぶこととなり，1952（昭和27）年に掘削されたトンネル．



水没している布引隧道と作品「黒い狩人の往来」

●関連エリア 炭鉱景観公園，幌内市街地，鉄道記念館，アートミュージアム

ビジターセンターから布引立坑とは別の沢を上流部に向かうと，広大な選炭機跡の敷地に坑口や大正時代の変電所などが残っている．ここは，2001年から続けられている地道な市民活動によって，幌内炭鉱景観公園として巡回できるように整備されてる．さらに下流部に向かうと，昭和初期の名残を残した幌内市街地，北海道での鉄道発祥の地にちなみ鉄道記念館，三笠出身の川俣正氏の作品も収蔵する幌内中学校の校舎を活用したミカサ・モダンアートミュージアムなど，見どころが多数ある．

●関連展示 幌内布引アートプロジェクトの記録などを含めた報告展

2009年11月27日（金）～12月08日（火） CAI 02

2009年12月10日（木）～12月27日（日） NPO そらち炭鉱の記憶マネジメントセンター

スライドトーク：上遠野 敏&札幌市立大学美術部 noumenon（ノメノン）／酒井 裕司（NPO 炭鉱の記憶推進事業団 事務局長／吉岡 宏高（NPO 炭鉱の記憶推進事業団 理事長）



関連展示風景

協力：炭鉱施設の解説：吉岡宏高 撮影：中優樹 上遠野敏 札幌市立大学美術部 noumenon